

田んぼのめぐみ 守り続ける

沢畑 亨



撮影：尾崎たまき

山間地域に元気生む 「愛林館」の活動

熊本県水俣市の山間部、久木野地区にある地域づくり施設「愛林館」の館長をしています。全国公募で選ばれて、21年目に入りました。愛林館は水俣市が建設して、地域の住民団体「水俣市久木野地域振興会」が指定管理者として運営し、私はその職員です。

愛林館では、食品加工（梅干し、みそ、お菓子など）、直売

所、週末のカフェ（タイの激辛カレーが人気）、食べ物作り体験（そば・うどん・豆腐・こんにゃく・ピザ・バウムクーヘン）、棚田保全（水田と大豆耕作、草刈り）、森づくり（ボランティアと21杉）、炭焼き、研修受け入れ（地域づくり、森づくり、環境問題など日本語と英語で）、イベント開催（参加者480人のしし鍋マラソン、見学者500人の棚田のあかり、コンサートなど）を行っています。

買う方が安上がりだが

久木野地区の面積は4300畝。90%が森で棚田は80畝です。石垣の棚田は美しいのですが、耕うん機や田植機など、乗用ではなく歩行型の機械がまだまだ活躍しています。

美しい棚田を守っているのはサラリーマンや年金暮らしの皆

増水防止、地下水貯蔵、景観、多様な生物 棚田から「のさる」恩恵

2割。取れるお米がおいしいし、人に贈ると喜ばれてうれしいという積極的な理由が3割といった感じ。こちらの「ヒノヒカリ」はとてもおいしいし、香り米を混ぜると最高です。それに、人にモノを進呈するというのは誇らしいことでもありますね。

こうして、頑張って棚田を守る人がいるおかげで、雨が降っても棚田に水を貯めて川の増水を遅らせたり、棚田から水が漏れてすごい量の地下水ができたりにしています。

水の中にはいろいろな生物がすみ、トンボやカエルは蚊やハエやウンカを食べてくれます。水がきれいなので、棚田にイモリやサワガニもいます。オモダカも育っています。

5月の田植え前には、水面に山や空が映ってとてもきれいですし、秋分の日には彼岸花が毎年間違いない咲きます。

こうしたことは、「多面的機能」と言っていますが、せめて「公益的機能」と言いたいです。数が多いだけでなく、みんなの役に立つのですから。でも、私は宇根豊氏の「田んぼのめぐみ」という言葉が好きです。人間が棚

田で育てているのは稲だけで、地下水やトンボや景色は勝手についてくるものですから、「のさる」（共通語なら「授かる」という意味の熊本弁）ものです。

公益的機能に お金出してください

田んぼのめぐみは、棚田以外の田んぼにも共通です。でも、棚田は山村に人が暮らす社会基盤の一つ。山村に人が暮らしていると、人工林の手入れを安くすることができて、「森のめぐみ」がのさりやすくなります。

こういうわけで、田んぼのめぐみ、森のめぐみにもっとお金を出してくださいませんか、と愛林館に来る方には訴えています。もちろん、新たに税をつくるのではなくて、今の農業や林業に対する補助金の使い方を変更するだけで十分です。農産物の値段は市場で決めてもらいましょう。その代わりに、環境上のめぐみにはお金を払うということです。これが充実すれば、もう少し住みやすい山村ができると思います。

（水俣市久木野ふるさとセンター 愛林館・館長）